大学生の授業レポートに見る教育の課題と希望（最終回）

西　伸之

道徳心理学の一潮流『社会的認知領域理論』（※）を扱った際、本来、道徳で取り上げるにはふさわしくない個人の趣味や選択にかかわる「パーソナルなもの」が、日本の道徳教育では無視どころか、それを主張することが非道徳的とされることが多い事実を伝えました。その授業を受けてのレポートです。

※社会的認知領域理論

人間は、社会的世界をいくつかの領域に区別して認知しており、その領域は、他者の福祉（しあわせやゆたかさ）に関する概念（共感）である「道徳性」と、法やルールに関する「社会的慣習」、個人の趣味や選択にかかわる「パーソナルなもの」の3つに区分されるという考え。

『学校の教育目標』の圧力

私も、友達が少ない自分は劣った人間で、友達が少ないのは、自分の性格に問題があるのだと思っていた。友達が多い・少ないが、その人の価値を決めたり、明るい性格＝良い性格ではないことはわかっていても、「たくさん友達をつくろう、元気で明るく学校生活を過ごそう」の言葉が頭に残り、そういった子どもが社会には求められていると、子どもたちの中に無意識的にあると思う。

「明るい・元気・友達たくさん」という幼稚園や保育園段階から先生に散々言われてきた「目指すべき理

想像」がカーストをつくりだしたり、いじめにつながったりすると分かったとき、ゾクッとした。それを達成した人が教室内の上層部に君臨し、その反対と考えられる「暗い・おとなしい・友達少ない」に当てはまる人は最下層につくという構成を、図らずも学校や教師が生み出していたのかもしれないと気づいたからだ。なぜ教師たちはこのような理想像を子どもに望んでしまうのだろう。それは、子どもを一人ひとり違った存在として見ているのではなく、まとまりとして分類してしまう傾向があるのではないかと考える。それは、教師にとって指示の出し方や指導が楽になるという利点があるのかもしれない。しかし、その分類から漏れてしまった子や勝手に分類されたことで傷を抱える子がいると思う。

私は小学生のころ、先生に怒られることがよくあった。その時に先生はいつもきれいごとを言っていた。現実的ではない正論を押し付けてくる先生が嫌いだった。先生のそういう意見を聞いて、もっと先生に反抗したいという気持ちになったことを今でも覚えている。この経験があるからこそ、「正論やきれいごとはNG」という言葉がすごく印象に残った。いじめにしても、非行にしても、正論だけではなく、その子がそうしてしまった動機をちゃんと聞き入れてあげることをしなければ、もっと先生に反抗したいという気持ちになる。正論では片づけられないモヤモヤした気持ちを誰かに受け入れてもらうことで自己肯定感が高まることにつながっていくのだと考える。

○○スタンダード

講義の中で「○○小学校スタンダード」と呼ばれるものが出てきた。これは8年ほど前からよく言われるようになっていたと講義中に説明があったが、8年前というとちょうど自分が小学6年生の頃である。当時のことを振り返ると、自分の小学校でも、学習のルール、ここでいう「スタンダード」というものが、児童用と保護者用の冊子になって配付されたことを思い出した。講義資料では学習の約束、筆箱の中身、声のものさしが示されていたが、自分の小学校ではそれらに加えて、話を聞く姿勢、話す時の姿勢、ノートのとり方、自主学習の仕方について事細かに書かれ、写真で示されていた。当時は特に疑問を抱いてはいなかった

ものの、今考えてみると、スタンダードもあくまで一つのやり方であって、全員が揃える必要性はあるのかと思った。その通りできないと学校が居づらい場所になるし、無理にそれに合わせようとしてつらくなる子も出るのではないか。

学校生活の隅々まで決まりが敷かれている学校の現状に心当たりがあった。私の学生時代、特に小学校時代はそういった傾向が強く見られたからである。机や椅子を置く位置にシールが貼ってある、ノートのこの部分にこれを書きここにこれを書くといった、ノートづくりの規制は普通に行われていた。私もそういったことに慣れ切っていたためなんとも思わなかった。今日の授業を聞いていてどうしてそれが普通だと感じていたのだろうと思い直した。

多くの小中学校で取り入れられている『〇〇スタンダード』。教師の力量に関係なく、効率よく教育効果を上げるため、「持ち物」や「姿勢」「机や椅子の配置」、「休み時間の過ごし方」、授業中の「発言や発表の仕方」「声の大きさ」「ノートの取り方」、「清掃の仕方」など、学校生活すべてにその学校の約束（どこも同じようなものが多いが）を、入学した時から徹底する教育方法です。〈子どもに合わせる学校〉ではなく、〈学校に子どもを合わせる〉象徴的な取り組みといえるでしょう。それに合わせて教師も、使うチョークの色や書き方を同じにするように求められています（横書きの場合は、左上に「授業の課題」を書き赤チョークで囲み、右下に「授業のまとめ」を書き青チョークで囲むなど）。本来子どもたちは、経験を重ねながら、自分にとって最も効率的で適切な学習方法や生活の仕方・時間の使い方等を身につけていきます。そのためには、失敗も含めた試行錯誤の時間が保障されなければならないし、本来学校はそういう場所であるはずです。たしかに、学習ルールや学校生活のルールには、あらかじめ教え込むべきものもあるでしょうが、それは集団生活を維持し、その中で自分を伸ばしていくために最低限必要なものに限られるべきではないでしょうか。『〇〇スタンダード』は、自分で考えるのではなく、あらかじめ決まっている約束やルールに従い守るだけの主体性のない人間を育てるだけでなく、それができない子を苦しめ排除することにつながる大きな問題がある教育方法です。

競争的な日本の学校

私の学校は中学受験をして入学するところであり、親や教師も厳しめであったように感じる。その中で、ストレスを発散したいがために、一部の人間がいじめを行っていた。それも堂々と落書きをしたり、ごみ箱に私物を捨てたりではなく、地味にコツコツと隠れた場所でやることが多かった。それは、いじめはいけないという意識がその行動にはあったのだろう。いじめはいけないが、でも何かで発散したいという葛藤があったのだと今は思う。

今まで学校の中では、テストや受験、運動会、コンクールなど、たくさん競争をしてきたと感じます。たとえそれが、「優劣をつけるものではなく、現在の学力を調べるもの」としてテストを受けても、どこか競争を意識していた自分がいます。学校教育の中で周囲と比べてしまうくせがついてしまっています。

「いい子」と言われるが

私は昔から、親からも友達からも優等生だと思われていて、高校生になるまでは、自分でも、「私は優等生でないといけないから、テストでは良い点数を取って、友達とはできるだけ問題を起こさないで、良い大学に進学しなければならない」というように思っていた。「自分がこうしたい」というよりも、「周りの人の期待に応えるため」に、人生の選択をしてきたと、大学生になった今、やっと気づいた。教育学部を選んだ理由も、自分の意志ではなく、親の意見の方が強かったと思う。人からの視線を気にして生きて、人の言葉の裏を探り、自分の意見がまるでない自分を嫌いになり、学校もあまり好きではなかった。私にとって、学校は、20％が楽しいもので、80％は息苦しくて怖い場所であった。

私は小中学生のころ、親から日々言われていたこともあり、いい成績をとらなければならないということで頭がいっぱいだった。「先生も人なんだから、好き嫌いあるし、ちゃんと先生に好かれていい成績をとらないといい学校に入れないよ」とたくさん言われていたこともあって、道徳の授業でも、先生の言い方や口調から、「先生はこっちの方がいいと思っているんだ

ろうな」ということを読み取って、その意見を書く、ということで頭がいっぱいだった。だから、周りの友人が自分が思いつかなかったようないい意見を出して先生に褒められていると、とにかく悔しさで胸がいっぱいだった。

学級評議員や部活の部長などをやりましたが、忘れ物をしないように何度も家で確認をしたり、部活も部長だから休めないなどと、今考えると中学校が非常に息苦しかったです。振り返ってみると「忘れ物は成績に影響する」「内申が下がる」「部長なのだから」「顧問の先生に言うぞ」などと教師は言っていましたし、先生の言うことは絶対だと思っていたので、これらの言葉に影響されて偽りの自分を装っていたのだと思います。

規則に従うことと、規則を変えること

私の通っていた中学校には、スニーカーソックスは地味な色でないといけない、という校則があった。学年朝会では、わざわざ靴をぬがされ、靴下の色を抜き打ちでチェックされることもあった。「おかしい」と思っていたため先生に異議を申し立てたら、「社会には理不尽なルールがたくさんある。そのルールに従うことも大切なことだ」と言われた。大人も、子どもも、その生きづらい社会に適応する力ではなく、生きづらい社会を変えるための力を身につけるべきだと考える。

中学生の時、自分は校則や生徒会の活動がとても苦手でした。今思い出しても意図が分からないものばかりで、当時の自分はかなりとがっていた面もあり、協力する気になれませんでした。そんな中、多くのクラスメイトや先生方からの推薦があり、自分の意思とは正反対に、生徒会長選挙に出ることになってしまいました。どうせやるなら、無駄なものをなくし、必要なものだけを学校に残そうと思い、「クリーンな学校にしよう」という自分なりの訴えを選挙の演説や公約にのせて先生に提出してみました。後日、どうやら僕の考えた内容が生徒会長として「ふさわしくない」らしく、職員会議で書き直すように決まったようです。学年主任の先生から、すでに内容の決まっている原稿を渡され、これを自分の言葉で書くようにと書き直しを指示されました。この時、理不尽さと不自由を感じた

ことを覚えています。無事選挙が終わり、副生徒会長となったあとも、周りが求める像と、自分が推し進めたいことが大きく離れており、何もなすことができませんでした。なすことをさせてもらえなかったというほうが正しいでしょうか。何かを変えようと進めるには、しがらみが非常に多いように感じます。今回の講義内であったように、（日本の道徳教育で教える「規則の尊重」「遵法精神」の項目は）「ルールは当然守るものであり、その改変に関しては触れることがない」という点に非常に共感できました。既定の規則や、以前からのしきたり・風習は盲目的に従わなくてはならず、そのこと自体を変えようとしたりすることはよくないこととされる風潮に息苦しさを覚えます。

今回の講義を受けて、高校生の時に入っていた生徒会で、学校を変えようといろいろなことをした経験を思い出しました。私は創立10年も経っていないできたばかりの中高一貫校に通っていたのですが、疑問に思うような規則が多くあり、不満に思っている生徒がとても多かったです。そこで、生徒会では、自分たちの代で学校を変えたいと思い、何度も校長室に通って話し合いを重ねました。はじめは生徒も先生もなぜそんな面倒なことをするのかというような雰囲気ではあったものの、しばらく活動を続けているうちに、頑張れと声をかけてくれる人が増えていきました。結局、全て思い通りに変えることは出来ませんでしたが、達成感を味わうことができ、忘れられない経験になりました。大学生になった今考えることは、自らの行動で他の人の心を動かすという貴重な経験ができて良かったということと、私たちを支えてくれた先生たちへの感謝です。

「動けば変えられる」と感じた体験がある。中学1年のときに通っていた学校にない軽音楽部を新たにつくるために友人らと署名を集めたときである。署名を先生に提出し、結果は楽器購入の費用や顧問の問題でうまくいかなかった。しかし、結果を伝えるために私たちを呼び出した先生は、きちんと理由を伝え、意見に真摯に向き合ってくださった。私は署名活動中に「どうせ無理だろう」と考えていたが、その先生の態度をみて子どもの力でも変えられる可能性を感じることができた。この経験は失敗に終わったが、大人と学

校に対する信頼感と自分の自信につながる良いものだった。

道徳の学習指導要領の〈規則の尊重〉には、小1から中学まで「約束やきまり（法）を守ること」が共通し、小学校高学年からは、それに加えて「義務を果たすこと」が書かれています。そこには、きまりを「つくる（変える）」視点はありません。本来、憲法で保障された権利と（納税などの）義務は、対比される概念ではないのに、商取引などの約束（契約）で使われる「権利と義務」を使って、「権利の主張は義務を果たしてこそ」と無条件に保障されている基本的人権を制限することが、とんでもない間違いであることはいうまでもありません。しかし、そうした価値観に貫かれた道徳の学習指導要領に従って作られた教科書を使って授業をしなければならないことは大問題です。さらに問題なのは、「ルールや法は所与のものであり、内容の如何を問わず〝当然守るべきもの〟と教える（ルールや法の作成や改廃には踏み込まない）」ことです。「ルールや法を、つくり従う主体」を育てるシチズンシップ教育を行っているヨーロッパ諸国の道徳教育と決定的に違う点です。日本の若者が「社会現象が変えられるかもしれない」と考える割合が極端に低い（平成26年度子ども若者白書：内閣府）のも、そんな日本の教育の結果ではないでしょうか。

学生たちのレポートから考えた『私が願う学校』をまとめ、報告を終わります。

□「学校のための子どもたち」ではなく、「子どもたちのための学校」であること

□どんな自分であっても、安心していられ大切にされていることを実感できる場所であること

□失敗が許され、子どもたちがさまざまな経験から学べる、ゆとりある場所であること

□「ねばならない」や「こうあるべき」に縛られず、自分が自分であっていいと思える場所であること

（にし　のぶゆき）